

水無月に「水」は「無い」のか

■新編集講座 ウェブ版 第126号 2019/6/15

毎日新聞社 技術本部長（元・大阪本社編集制作センター室長） 三宅 直人

6月は、旧暦で異名として、「水無月(みなづき)」と称します。その詩的な印象から、「水無月」を紙面の見出しとして使うことがあります=右図①。旧暦6月は、おおむね新暦7月の梅雨明け時期に当たることから、私は文字通り解釈し、「水」が「無い」月だと思っていました。ところが最近、「水無月は『水の月』という意味。『無』は当て字」という説を知りました。「水」の有無で水無月のイメージは逆になります。実際どうなのでしょう。

■「みなそこ=水の底」「みなづき=水の月」

今年の6月に入ったばかりの1日（土）、朝日新聞朝刊の片隅に「水無月」「無は『無い』ではない」という見出しがひっそり載っているのに気づきました=右図②。休日だったのですが、商売柄、他紙にも目を通すようにしています。私は編集者生活が長かったので、こうした言葉に関する記事には、すぐ目が向くのでした。

記事は、水無月について国語学の専門家が「『水の月』の意とする説が主流だと指摘」していることを紹介しています。理由として、語の組み立てが「水底(みなそこ=水の底)」や「港(みなと=水の門)」と同じであり、「みなづき=水の月」になるそうです。さらに、「『(水無月の) 無』の字は『無い』という意味ではなく」「一種の当て字と考えてよい」という、この専門家の見解を補足しています。

■大歳時記は「炎暑のため水の無くなる月」

朝日の記事を読み、「水が無い月」だと思い込んでいた私はびっくり。では毎日新聞ではどう見ているのだろうと記事データベースを調べたところ、同じ疑問を持ち、取材した編集者がいました。

やはり「水が無い月」派だったこの編集者は、インターネットで「水の月」説が主流なのに違和感を覚え、手元の歳時記(角川俳句大歳時記)を調査。「一般的に炎暑のため水の無くなる月の意と解されている」と記されているのを読み、納得したそうです=右図③。私も社の書庫で、同じ版元の歳時記を調べると、確かに「水かれ尽きて地上に水のない月とするものが最も多い」とありました=右図④。

この記事には、▽図書館で歳時記を調べると、水の月説2冊、水無し月説2冊、融合説1冊だった▽国内最大の「日本国語大辞典」と最も有名な「広辞苑」が水の月説で=右図⑤、ネットで水の月説優勢の理由になったと思われる——など興味深い記載もありました。

水があるのか、無いのか。結局は両論あって、決めきれません。

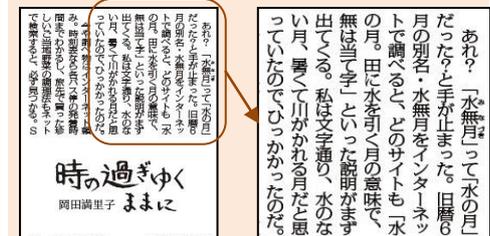


(左) ①
2007年
6月2日
毎日朝刊
山口版

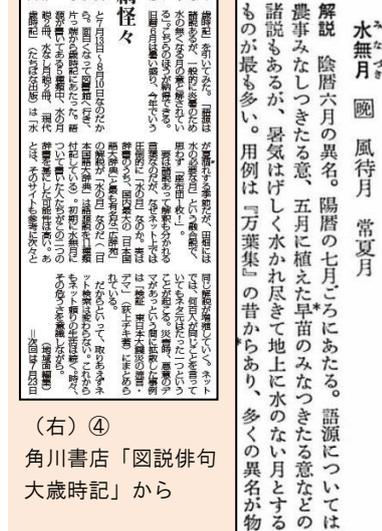
俳句風の見出し
この例は、「アユ」「夏」「水無月」と季節が重なり、専門家から「季重なり」と減点されそうです。編集者の工夫は買いますが、句作は難しいものです。



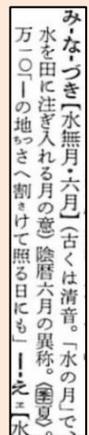
(上) ②19年6月1日
朝日朝刊オピニオン面



(左と上) ③
18年6月18日
毎日夕刊(大阪) 2面



(右) ④
角川書店「図説俳句大歳時記」から



(右) ⑤岩波書店「広辞苑」から

■ 「共通理解」があつてこそ

冒頭で触れたように、編集者は旧暦の月の異名を見出しに用いることがあります。単に数字で「3月」とか「9月」と言うよりも、3月なら「弥生(やよい)」、9月なら「長月(ながつき)」と表現した方が、見出しの醸し出すイメージが豊かになるからです。

ただその場合、読者と編集者の間で共通理解が必要です。例えば12月の「師走(しわす)」なら、俗説かもしれませんが、「師(僧侶や教師とされる)が走り回るほど諸事多忙な季節」という解釈が一般的です。だから「師走の事件事故にご注意」という見出し=右図⑥=なら、「忙しい時期だから注意が散漫になりやすい」と納得できます。また「師走の古都、力走」という見出し=右図⑦=なら、「『走』という字で言葉遊びをしている」と、狙いが読者に伝わります。

■ 「水面」と「炎天」、正反対のイメージ

では、水無月の場合はどうでしょう。これまで見たように、水の月説と水無し月説という、イメージが全く反対になる解釈が、それぞれ自信たっぷりに自説を主張しています。強いて言えば、国語学系は水の月に、文芸系は水無し月に傾いているようです。

水の月説なら、田植えシーン=写真⑧=に「水面に人影、みなづきの田植え」という見出し(私の作)を付けることが考えられます。「水面(みなも)」と「みなづき」で韻を踏み、さらに「水が無い」という解釈が紛れこまないよう、「みなづき」をかな書きにしました。

水無し月説なら、きつい日差しの光景=写真⑨=に「水辺が恋しや、水無月の炎天」という見出し(私の作)を付けるのもいいでしょう。「水が無い」「炎天」と「水辺」の対照の妙を狙いました。

■ 解釈は同じ、写真に違い

読者と編集者の間で共通理解がないと、見出しをめぐって混乱が起きます。「真夏日五月晴れ」という見出し=右図⑩=が大阪本社発行の紙面に掲載された時は、「『五月晴れ』は梅雨に晴れることなのに大阪は梅雨入り前です。間違いでは?」という読者の声が寄せられました=新編集講座77号「6月の五月晴れ 旧暦と季節感」参照。

だから、水の月説と水無し月説のいずれとも決めきれない、つまり読者の解釈も両様と予想される水無月の場合、あまり一方的なイメージを与える見出しは慎んだ方がいいのかもしれませんが。

そう思い、改めてデータベースを調べると、京都の銘菓「水無月」が全国各地に広がっている、という記事がありました。これはお菓子の名前であり、ためらわずに見出しにできるなあ、と感じながらさらに調べると、大阪本社の紙面が「本家」京都製の写真を使っている=右図⑪=に対し、西部本社の紙面はそれを省き、代わりに福岡製と沖縄製の写真を載せていました=右図⑫=。見出しの解釈に揺れはなくても、写真の扱いに差は出るのだと、妙に感心しました。

横断歩道を歩行中の事故について、過去10年間の事故発生件数は12月が最多で、443人がけがをし、26人が死亡していることが警察の調べで分かった。交通企画課は「日没が早まる上、師走で行事が増え人の動きが慌ただしくなるため」と分析している。

2008~17年で統計をとり、12月は計451件が発生した。年別だと死亡、負傷とも09年が最も多くそれぞれ6人、60人だった。それ以外の年は死者が0~5人、負傷者は30~50人台で推移している。時間別の件数では、日暮れ前後の午後4~6時、同6~8時で41件を占めた。年齢別の死者数は、75歳以上が最多の108人で23名、15歳未満が2人の13名で続いた。

同課はドライバーに対して①歩行者優先を常に認識する②明らかに横断者がいない場合を除き、横断歩道の直前、停止線の直前で停止できる速さで進む③横断者がいる場合は直前で一時停止し、通行が滞りしないことを呼び掛けている。【入江麻樹】

師走の事件事故にご注意

(左) ⑥
18年
12月21日
毎日朝刊
鳥取版

奈良マラソン
師走の古都 力走
フル優勝 塚本選手^男、山口選手^女

⑦
18年12月11日
毎日朝刊
奈良版



(左) ⑧ 伝統の田植え行事
|| 広島県内で19年6月



(左) ⑨ 炎天の下を歩く人
|| 東京都内で14年6月

真夏日五月晴れ
大阪で30.7度
23日は高圧の影響で全国的に朝晩、気温が上がった。西本では京都府で33.1度記録。大阪市は30.7度、今年初めての真夏日となるなど、各地で今年の最高気温を更新した。

大阪管区気象台によると、各地の最高気温は、奈良市30.7度▽高知市30.6度▽和歌山市30.5度▽岡山市30.3度

(左) ⑩ 16年
5月24日毎日
朝刊大阪一面

水無月100年 変化 流行

京の風物詩 全国区に

これは博多流

(左) ⑪ 18年6月26日
毎日夕刊(大阪) 総合面

京都の銘菓「水無月」実は全国に

福岡 大胆な創作 / 沖縄 縁起担ぎ

(左) ⑫ 同日
毎日夕刊(西部) 総合面